

越冬地外での親交白鳥の行動を見る

村瀬正夫・村瀬美江

私共の「クロチャン」一族との親交は全くと云ってよい程越冬地（北上市の新堤・北上川）に限られており、彼等の越冬地外での情報はほとんどが他力本願で、他人のデータ或いは連絡に頼るのが常でした。それでも私共の行動許容範囲である福島から盛岡までは連絡があるとすぐに確認に出かけておりましたが、その都度、落胆するケースが多かったのが実態でした。

そんななかで1992年春の北帰時に、「クロチャン」一族の北帰ルートがほぼ推定され、日本野鳥の会研究報Strix Vol.11 に報告できました。そこに記載されたように「クロチャン」の国内での最終立寄り地は浜頓別のクッチャロ湖で、そこから海岸線に沿って北上しサハリンに向かうものと考えられ、従って「クロチャン」一族をキャッチ出来るのはクッチャロ湖が国内最終観察点とっていました。

1996年4月27日、日本白鳥の会第23回総会が浜頓別で、翌28日、第20回研修会が稚内で開催されたのを機に、クッチャロ湖と大沼とで、早番で北上を飛去した「クロチャン」一族をキャッチすることを試みました。

クッチャロ湖は26日の15時から28日の8時半まで、大沼は28日11時半から29日の11時半までが観察日時でしたが、その間クッチャロ湖には12,000羽を超える白鳥が、大沼には4,000羽程の白鳥が滞留しており、果して簡単にキャッチ出来るかどうかが大いに懸念されました。確かに給餌場や湖岸道路附近にかなりの数の白鳥が寄ってはいますが、湖が大きく、湖面中央や対岸にただよう白鳥も多く、とても全部を観察することなどは出来ない相談でした。それでもこの旅で北上で越冬したり立寄ったりしていた5羽の白鳥を確認出来たので、北上を離れた順に列挙します。

(1)「アピ」：この白鳥は「クロチャン」一族とは無関係のアメリカコハクチョウで、1994年と1996年のいずれも春の北帰途中に北上に立寄っており、今シーズンは3月27日まで北上市の新堤におりました。「アピ」は福島市の阿武隈川でもよく観察された白鳥です。

(2)「ナオチャン」：この白鳥は「クロチャン」の1988年の子「ナガレ」と雌のアメリカコハクチョウ「チビクロ」との子で、「クロチャン」の最初の孫の3羽のうちの1羽。4シーズン連続で飛来しており、今シーズンは3月29日に新堤から飛去しました。「ナオチャン」は「アピ」同様4月26、27、28日のすべてでクッチャロ湖白鳥の舎前で確認され、名前を呼ぶと越冬地同様に急いで泳ぎ寄り、手からパンを受取ってゆきました。越冬地と違いオオハクチョウがいない分だけすいすいと寄ってこれたのが目につき、腹がふくると少し離れて眠り込んでいました。

(3)「ヤン」と「ソーリー」：「ヤン」は「クロチャン」の1990年の子の「ニイチャン」と雄でⅢ型コハクチョウの「バフ」とのつがいの子で、「クロチャン」の2度目の孫3羽のうちの1羽で3シー

ズン連続で飛来しており、今シーズンはⅡ型コハクチョウの「ソーリー」と同行飛来したものの。「ヤン」と「ソーリー」はシーズン中ペア行動しており、4月2日には揃って新堤から飛去しましたが4月26, 27, 28日は毎日クッチャロ湖で確認され、「ナオチャン」同様にこの2羽も揃ってパンを受取りに来る行動は越冬地と変わらなかったもので、「クロチャン」一族は私共と相互に確認しあえさえすれば越冬地も立寄り地でも同じ親交状態は保たれることがわかりました。

(4) 冠のあるコハクチョウ：この白鳥は北上では今シーズン初めて観察されたもので、北上市珊瑚橋下流に北帰途中4日間滞在し、4月10日に飛去しました。4月28日クッチャロ湖の水鳥観察館に近い湖岸道路を白鳥の舎の方へ向う姿が認められました。東京の尾亦実さんによるとこの白鳥は福島県樽栖葉町の農業用水池の大堤で過去3年間連続で認められていたもののようです。

以上が今回の観察の概要ですが、この旅で気付いた2、3の事柄について付言しておきます。ひとつは先着の利についてですが、北上から北帰した鳥で見える限りでは早く出発した順にクッチャロ湖白鳥の舎のより給餌場に近い位置で見つかっており、越冬地同様に先着した順に有利なポジションを確保していると思われます。次は渡りのルートに関するものですが、福島、宮城、岩手など東北太平洋側で越冬したコハクチョウおよびアメリカコハクチョウはかなりの高率でクッチャロ湖を日本での最終立寄り地としていると思われます。しかし少数例ですが北上の立寄り白鳥が稚内の大沼で確認されており、全部が全部クッチャロ湖というわけではないようです。最後になりましたが、今回の研修会でクッチャロ湖で観察された冠のあるコハクチョウおよび頸に大きな病巣のあるコハクチョウの内地での越冬地が判明しましたが、以前の研修会でも尋ね鳥などで特徴のある白鳥の移動情報が交換されました。このような情報はひとつひとつでも役に立つのですが、ああそうかでお仕舞いにするのではなく、整理して蓄積しておくことで、国内における白鳥の道の解明に資することが肝要と考えております。

以上

1996年5月6日記